みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

日本列島への先史人類の移動と拡散：共同研究：人類の移動誌：進化的視点から (2008～2011)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 印東, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5081

PROJECT

日本列島への先史人類の移動と拡散

文 印東道子

共同研究 ● 人類の移動誌：進化的視点から（2008-2011）

アフリカ大陸で誕生した人類が、数十万年をかけてユーラシア、アジア、南北アメリカ、オセアニアへと移動したルートや時期、そして、人類がこれほど広範囲に移動した背景などを追求する本共同研究も3年目に入った。昨年度は3回の研究会のうち、2回を使って、沖縄への人類移動と、縄文人と弥生人の関係性に関する問題について、最新の研究発表とそれに続く熱心な討論が行われた。

沖縄への人類の移動

沖縄は、旧石器人類の日本への移動を考えるのに欠かせない地域である。本土では旧石器人骨がほとんど見つかっていない中で、沖縄諸島からは港川遺跡を中心に5〜9個体分の化石人骨が出土しているからである。これまでの研究では、唯一、頭骨がほぼ完全に復元された港川人骨の形態的特徴から、祖先集団は東南アジア方面に求められるとされていた。また、縄文人骨との類似性も認められたことから、沖縄の旧石器文化人は縄文人の祖先集団であると考えるのが一般的であった。

しかし、昨年度第1回研究会における一連の研究発表からは、これら従来の考え方を大きく変える人間移動のシナリオが提示された。

- 海部陽介「後期更新世のアジアにおける人の移動誌：港川人の再検討を中心に」
- 高宮広土「南島中部圏へのヒトの拡散と適応過程」
- 米田穣・中川良平「琉球諸島へのヒトの拡散：『最後の陸橋』はあったのか？」
- 石田肇「琉球諸島のヒト――過去から現代まで」

港川人骨で唯一完全な顔面が復元されている1号男性頭骨の接着に、ゆがみがあることに気づいた海部陽介（国立科学博物館）は、コンピュータを使って仮想復元を行った結果を紹介した。下顎骨がこれまでの復元像よりも狭くなり、「頑丈な顔面」と描写されてきた特徴はなくなった。この下顎骨の計測値を元に、他の旧石器人骨や縄文人骨との比較解析を行った結果、次のような特徴が明らかにされた。

日本の旧石器時代人骨で唯一完全な顔面を持つ港川1号人骨（左が従来の復元像で右が新たに補正された復元像）。濃く網掛けした部分の接合関係が修復された（海部陽介提供）。

1）港川人と本土の縄文人はあまり似ていない。旧石器文化人と縄文人との連続性は、少なくとも沖縄では認められない。

2）港川人と形態特徴がもっとも近い現代人集団は、アジア人ではなくオーストラリア・ニューギニアの人である。ただし、両地域の直接的関係を示すものではなく、それぞれの祖集団が完新世前半ごろには東南アジアに広く分布していた可能性を考えるべきである。

これらの海部の指摘は、沖縄の旧石器人類が海を越えて移動してきたことを間接的に示唆するものであるが、打製石器しか持たない人類が海を越えることができたのかという問題が浮かび上がる。しかし、今から4.5〜5万年前に東南アジアからオーストラリア方面へ移動した旧石器人類がすでに海を越えていたことを考え合わせれば、何らかの方法で海を渡ったことは間違いない。

これをさらに裏付けるのが、古環境に関する研究である。米田穣（東京大学）らは、古地理や地質学的情報を再検討した結果、旧石器人類が琉球諸島に移動したと考えられる更新世後期に、琉球諸島はアジア大陸と陸続きになったことはないことを明らかにした。沖縄への人類の移動は、どの時代も海を渡って行われたことを示すものである。

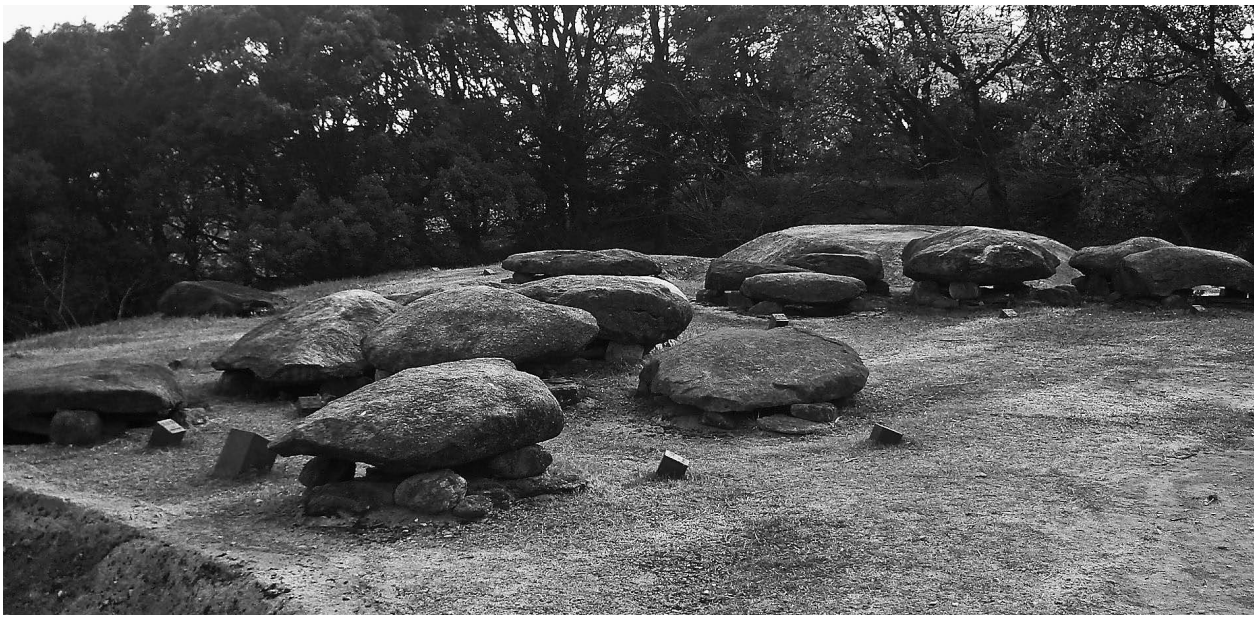
人骨以外の沖縄の旧石器文化遺物は、残念ながら乏しい。人間移動の規模や時期、島での暮らしに関する情報の増加が待たれる。

旧石器以降の沖縄への人類の移動に関しては、沖縄本島を中心とする沖縄中部圏と、宮古や八重山諸島などの南部の島々を中心とする先島地域では異なっていた。先島へは、4,000年前ごろに南から人が渡来して先島文化圏が形成されたのに対し、沖縄中部圏へは北から、つまり九州から縄文文化を持った人の拡散が行われた。この北から南に向かう人や文化の流れの方向はその後も続くが、農耕を示す証拠はなく、10〜12世紀まで狩猟採集社会が続いていた。稲作が沖縄を伝わって南から日本本土に入ったとする柳田國男の「海上の道」説は、高宮広土（札幌大学）によって繰り返し否定されている（高宮 2005など）。他方、沖縄の縄文から弥生相当期人骨の虫歯は17パーセントあり、狩猟採集民としては高率であることが石田肇（琉球大学）によって指摘された。歯に粘着するような植物食を摂取していた可能性があるという。

琉球諸島内で、在来の旧石器文化人とあとからやってきた新石器文化人とが出会った可能性については、研究者の意見は一致していない。高宮は、旧石器文化人が島嶼環境に適応できずに島を去るか絶滅したため、このような出会いはなかったと考える。

縄文と弥生

第2回研究会では、本研究会が明らかにしようとするもう1つのテーマ「先住集団と渡来集団との文化的関係」を検討するため、縄文と弥生の関係性をめぐって発表が行われた。



支石墓（佐賀県久保泉丸山遺跡）。朝鮮半島起源の埋葬遺跡（松本直子撮影）。

- 中橋孝博「北部九州への渡来：渡来人と土着集団」
- 松本直子「物質文化からみる人の移動と文化変化：九州を中心とした西日本における縄文・弥生移行期の様相」
- 小林青樹「縄文集団と弥生集団の相互交流と弥生文化・弥生社会の形成」

縄文人や縄文文化、あるいは弥生人や弥生文化に関する研究史は長く、考古学や形質人類学研究を中心に行われてきた。しかし、渡来系とされている弥生人と在来の縄文人の出会いとその後の関係性を正面から取り上げた研究は少なかった。特に、弥生時代の開始が従来の紀元前300年より500〜600年も早かったとする最近の研究結果を受け入れると、両文化の接触が従来よりも早く始まり、より長い関係性の歴史が存在したことにもなる。

そもそも、弥生人が渡来系であることにまだ異論を唱える研究者もあるが、縄文人骨とは明らかに異なる形態的特徴を持つ頭骨をはじめ、多様なデータに基づき、縄文人とは祖先を異にする集団が弥生期に大陸から渡来したことは間違いないと中橋孝博（九州大学）は指摘する。おもしろいことに、朝鮮半島から持ち込まれたと考えられる新しい埋葬形態である支石墓から見つかる人骨は縄文的であり、しかも西日本の縄文後期と同じ形式の抜歯が施されていた。このことは、縄文系の人が、渡来した葬法で埋葬されたことを示しており、両文化の融合がかなり早い段階で行われたことを示す。

渡来系の集団がいつごろどれくらいの規模で北部九州にやってきたのかについては、人骨資料が少なくてほとんどわかっていない。渡来系人口のシミュレーションをさまざまな変数を用いて試みた中橋は、最初に渡来した集団は男性が多く、縄文女性との混血を積極的に進めた可能性を示唆する。今後、分子生物学の研究が進めば、遺伝子情報から渡来系の移動規模と在来系の混血の様相が明らかにされそうである。

松本直子（岡山大学）は、渡来系集団と在来集団（縄文）との関係を三期に分けて整理した。

縄文後期後半から晩期にかけては、すでに大陸系の遺物や少量の栽培植物も見つかるので、大陸と何らかの接触はあったが、集団での移住はなかった。

弥生時代早期になると、北部九州の縄文晩期文化と朝鮮半島南部の無文土器文化とが積極的かつ速やかな融合を行った。集団で日本にやってきた渡来者は、自分たちだけでは集住せず、在来集団の中に入りこんで暮らした。その結果、在来集団は本格的な生業転換などの急速な文化変化を行い、物質文化や墓制なども変化した。

弥生早期から前期になると、北部九州の弥生人が西日本の山陰や畿内に移住していった。縄文遺跡と非常に近いところに弥生集落ができていたので、両者の間に緊張関係はなかったと考えられ、文化の融合が速いスピードで平和的に行われた（積極的融合であったと松本は指摘する）。

これに対し、東日本での両集団の関係を見ると、北部九州の板付遺跡で弥生文化が形成されてから、関東に到達するまでに500年もかかった。小林青樹（國學院大學栃木短期大学）は、このゆっくりとした弥生文化の東進の背景には「縄文の壁」が存在したと指摘する。つまり、海上を進むのに比べ、内陸にははるかに人口の多い縄文集落が形成されていたため、新しい文化の受容に時間がかかったということである。

日本の縄文時代の考古学資料は量的にも質的にも世界有数の研究資料である。人間の移動という視点から今後も多角的な研究が展開されることが期待できる。

【参考文献】

海部陽介・藤田祐樹 2010「旧石器時代の日本列島人：港川人骨を再検討する」『科学』80（4）：373-377。
高宮広土 2005『島の先史学』ボーダーインク。
高宮広土・伊藤慎二編 2011『先史・原史時代の琉球列島：ヒトと景観』六一書房。

いんとう みちこ

民族社会研究部教授。専門はオセアニア先史学、民族考古学。ミクロネシアのファイス島で継続的に発掘調査を行っている。天然資源に制約のあるサンゴ島に暮らす人々の居住史および生存戦略を、考古学的手法を用いて研究している。著書に『オセアニア　暮らしの考古学』（朝日新聞社 2002年）、共編著に『オセアニア学』（京都大学学術出版会 2009年）など。